

# 三心を磨く

学校だより NO. 43

平成30年 2月14日(水) 発行

須坂市立東中学校

文責：金井 勝久 教頭

<http://www.azuma-school.ed.jp/>

## 2月 校長講話

### あなたにとって家族とは

みなさん、おはようございます。寒い朝となりましたが、集まってくれてありがとうございます。

2月も半ばとなり、卒業式まであと1ヶ月となりました。3年生は、前期選抜試験も終わり、後期選抜試験に向けて、最後の追い込みを頑張っていることと思います。不安もあるかと思いますが、今は、絶対合格するんだという強い気持ちをもって、やりあげることが大切です。今まで頑張ってきた自分を信じて、最後の最後まで頑張ってください。

さて今日は、「家族」にまつわる1枚の絵の話をします。

以前、ある講演会に参加しました。講師は、美術館の館長をしていて作家でもある窪島誠一郎（くぼしま せいいちろう）さんという方でした。窪島さんは、ある方との出会いがきっかけとなり、今から21年前の1997年に、長野県上田市の外れの山間に、無言館という美術館をつくりました。

この美術館がほかの美術館と少し違っているのは、有名画家の絵を集めた美術館ではなく、全くの無名画家、というより画家にもなっていない人たちの絵を集めた美術館だということです。正しくは、これから画家になろうと志を持ち、希望に燃えて美術学校に入学しながら、戦争に駆り出され、日本から遠く離れた戦地で亡くなった人たちの絵を展示した美術館です。この「無言館」という名前は、展示される絵画は何も語らず「無言」ではあるが、見る側に多くを語りかけるという意味で命名したというのが、客もまた展示される絵画を見て「無言」になるという意味をも含んでいるということです。

窪島さんは、無言館に展示してある幾つかの絵を取り上げ、その絵に関するエピソードを話してくれました。戦争へと送り出される直前まで、「あと10分」「あと5分」と言いながら、自分の恋人をモデルに絵を描き続けた話や、お腹に自分の子どもを身ごもっている妻をモデルに絵を描いた、その妻が子どもを出産後、僅か半月で亡くなり、絵を描いた父親もその後病死した話など、聞いていても辛く悲しい話が幾つか語られました。

講演会の内容が心に残ったので、窪島さんが書かれた本を読んでもみようと思い、購入したのが、この「傷ついた画布（カンバス）の物語」です。『戦没画学生20の肖像』という副題がついているこの本を読み始めたところ、その中の1枚の絵にまつわる話に引きつけられました。

話の内容を要約するとこうです。その絵を描いた伊沢洋さんは、栃木県に生まれ、22歳で東京美術学校に入学しました。そして戦争に召集される1ヶ月前に『家族』という1枚の油絵を描きました。

穏やかで平和な一家団欒を描いた絵です。中央には上等な服を着た両親、左端には新調の背広を着てかたわらの蓄音機から流れてくる音に耳を傾けている兄さん、右端には盛装した着物姿の妹、奥には美術学校に入学したばかりの洋さんが詰め襟の制服姿でキャンバスに向かっていきます。テーブルには豪華な果物と紅茶の入った器が置かれています。当時としては、経済的にも恵まれていたごく一部の上流家庭を思わせます。何しろ、次男だった洋さんを東京の美術学校に入学させたくらいですから、伊沢家は相当お金持ちだったことが想像できます。

しかしその後、窪島さんが栃木県にある伊沢洋さんのお兄さん夫婦を訪ねたとき、窪島さんが目にしたその家は、全く想像を裏切るものだったのです。傾いた軒先、蜘蛛の巣だらけの天井、かしいだ縁側、もうそれはあばら屋と言った方がよいほどの家だったのです。窪島さんは、『家族』の絵と現実の貧しい伊沢家のギャップに一瞬言葉を失いました。そして、当時86歳になっていたお兄さんがこんな話をしてくれたそうです。

「いやあ、これは空想画ってヤツじゃないでしょうか。あの頃のうちの家族は、朝から晩まで畑仕事に追われていてこんなふうに一家でのんびりくつろぐ時間なんてありませんでした。洋はきっと、戦争に行く前に心の中で、残してゆく私たちにせめてこんな裕福な時間を過ごしてもらいたいと、そう考えてこの絵を描いていったんだと思います」

伊沢家では、洋さんを美術学校に入学させるときに、家宝にしていた庭のケヤキの木を処分して入学費にしたのだそうです。そこまでして自分を学校に入れてくれた両親や畑仕事をして両親を支えてくれた兄や妹への精一杯の感謝の気持ちを、洋さんはこの絵に込めていたのかもしれませんが。

この話を窪島さんの本で知った私は、なぜか無性にこの絵が見たくなり、それから暫くして、上田市にある無言館へ行ってきました。冷たい雨の降る寒い日でした。館内は人が少なく、ゆっくり見て回ることが出来ました。館内をほぼ一周し終えた最後の方に、この『家族』の絵がありました。絵を見ながら、この絵を描いた伊沢洋さんのことを思い、その家族のことを思い、私自身の家族のことを思いました。

みなさんにとって、『家族』とは何ですか。3年生は、受験を控えて、みなさんの健康や勉強への取組を心配して下さる家族のありがたみが、分かってきた頃かと思います。1年生、2年生は、いつも口うるさいとばかり思っている家族について、もう一度、見つめなおしてほしいと思います。

みなさんにとって、『家族』とは何ですか。

「無言館」は、上田市塩田（別所温泉の近くです）地域の「古安曾」という場所にあります。平成9年、窪島誠一郎氏により、信濃デッサン館の分館として平成9年に開館した美術館です。

【アクセス】上田菅平 IC から車で約30分

上田電鉄別所線塩田町駅から徒歩で約30分（4月～11月はシャトルバス有り）